恩寵の巡礼の歴史的性格について（上）

——絶対王制確立期における農民闘争の一形態——

富岡次郎

【要旨】イギリス絶対王制確立期の重要事件の一つである「恩寵の巡礼」の叛乱については、従来殆ど研究がなされていない。また絶対主義の社会的基盤としてのジェントリーに関する研究はいくつかのすぐれた労作が生れながら、絶対王制とジェントリーとの具体的な関連の考察には及ばなかつた。ここでは農民蜂起の主体的エネルギーを検討し、さらに小農民がジェントリーの同盟と指導を仰がなければならなかつた理由およびその共闘の分裂と叛乱の敗北の過程を考察する。こうして、この叛乱の歴史的性格を明かにすると共に、ジェントリーの上昇転化の姿を具体的に究明する。

目次

一、はじめに
二、問題の所在——学説史展望
三、農民蜂起の経過（以上本号）
四、ジェントリーの同盟と指導（以下次号）
五、農民の再蜂起と敗北
六、結び

一　はじめに

「恩寵の巡礼」The Pilgrimage of Grace 1536—37とは、ヘンリー八世の小修道院解散令を契機として、イングランド北部におきたカトリック教徒の叛乱をさす。私はこの事件をつぎのような二つの視角からとりあげようと思う。

まずこの運動は北部全州およびリンカンシャーにわたる

広範な地域におこり、約五〇・〇〇〇に近いカトリック教徒を蜂起させた大叛乱であり、絶対主義確立期における一六世紀の一連の激烈な農民闘争の発端を飾るものであり、イングランドの教会史上および農民闘争史上、注目すべき事件でありながら、わが国の学界ではほとんどその内容が紹介されず、[1]歴史上における位置付けおよび性格が明確にうちだされていない。この点を究明することがまず第一の問題となる。

つぎに、大塚久雄氏の業蹟を中心としてわが西洋史学界にすぐれた「ヨーマン」研究が行われてきたことはいまさら云うまでもないが、その結果ヨーマン＝中産的生産者層が絶対王制の成立を推進する「主体的社会的基礎」であり、「チューダー絶対王制成立の社会的落屏」であるとする大塚氏の説[2]が今なお支配的見解となつている。ところが、近時漸くジェントリー論が研究の緒につき、絶対主義権力の基盤はジェントリーにあるという考えが脚光をあびてきた。[3]しかし、それにもかかわらず、ジェントリーがどのようにして絶対主義権力の機構の中にあみこまれていつたかを示す労作がほとんどみられないのである。「恩寵の巡礼」にも多数のジェントリーの参加がみられるが、果してジェントリーの興隆と絶対主義との有機的な関聯はいかに説明さるべきなのであろうか。

以上のような観点から、私はできるかぎり、この運動を具体的に分析して、第一に、絶対主義下における農民闘争の一つのあり方を、第二には、そこにおけるジェントリーの役割を考察したい。[4]

① この叛乱を取扱つたものは李尾昭忠「十六世紀イングランドの農民抗争――特に恩寵の巡礼について――」（九州大学西洋史学論集第二輯）の論稿があるのみである。

② 大塚久雄「近代欧洲経済史序説」上ノ二、なお岡田与好氏の力稿「イギリス・マナー崩壊の基本的特質」㈠・㈡、「社会科学研究」五巻二、三号参照。

③ 最近のジェントリー論に関する労作としては、越智武臣「英国地主制の一考察」西洋史学二四輯、吉岡昭彦「イギリス絶対王制成立期の農民層『分解』――」商学論集二三巻五号、田中裕「絶対王制とゼントリー」京都大学人文科学研究所創立二五周年記念論文集、進藤牧郎「中世後期におけるマナ構造――ジェントリー形成の一前提――」金沢大学法文学部論集法経篇I、小松芳喬「ヂェントルマン考」（英国資本主義の歩み）。越智氏はジェントリー論を社会関係からアプローチして、ジェントリーを範疇的に地主的ジェントリーと富農的ジェントリーに分

け、鋭い分析を示された。吉岡氏は封建末期における「農民層分解の二つの道」（ブルジョワ分解と寄生地主的分解）に着目し、イギリスにも絶対王制の社会的基盤としての寄生地主制が存在したという新しい見解をうちたてられた。北部のジェントリーは範疇的には越智氏のいう地主的ジェントリーであり吉岡氏のいう寄生地主であると私は考える。

④ 私はこの論文の研究の対象を一応、運動の政治過程に限定し、経済構造は後日改めて考察する。

二　問題の所在——学説史展望——

恩寵の巡礼に関する学説史を整理すると、大体二つに大別することができる。第一は、この運動を修道院解散に反対する旧教徒の「宗教運動」とする説であり、第二は、絶対王制に反抗する「ジェントリー叛乱」とする説である。宗教運動説にはラッセル Russell, ドッズ Dodds, ヴェラコット Vellacott, ヒューズ Hughes が属する。ラッセルは十六世紀の多くの農民闘争を二つに類別する。一つはヘンリー八世の一連の教会改革に反対する「宗教叛乱」であり、リンカンシャーの一揆、恩寵の巡礼、デヴォンシャー一揆（一五四九）、北部領主の叛乱（一五六八）がこの型の一揆である。それに対してもう一つは農民の社会的不満を基調とする純粋の「農民一揆」であり、これは市民革命を指向し、エンクロージュア反対のためのケット Ket の一揆（一五四九）がこの典型であるとする。[1] ドッズは恩寵の巡礼の基本的原因はカトリック教徒の修道院に対する愛情であつたとみている。修道院解散反対への情熱がジェントリーと農民とを階級を超越して結合させた。[2] ドッズは農民層における社会的不満の意義を認めているが、農民の要求は村落共同体の諸権利を擁護しようとする反動的なものであつて、重大かつ有力な要素ではないと考えた。[3] ヴェラコットはドッズと同じような見解であり、ジェントリーや農民の政治的社会的要求を無視することはできないが、この叛乱の基調は修道院解散反対をスローガンとする宗教叛乱であるとしている。[4] ヒューズはリンカンシャーの一揆を信仰のための叛乱とみることは困難であるとしているが、北部諸州の巡礼は宗教的なデモンストレーションであると考える。[5]

ジェントリー叛乱説にはトーニー Tawney, ゲイ Gay, バスカーヴィル Baskerville の諸見解がある。トーニーは

封建末期の叛乱を二つに類型化し、十五世紀の叛乱を中央政府に対して一地方の全階級が結束した封建的叛乱と特長づけ、十六世紀の農民闘争を農民階級が経済的利害関係の対立を通じて地主階級に対して立上るという経済的階級闘争と規定した。彼はリンカンシャー一揆と恩寵の巡礼を基本的にはまだ十五世紀型の封建的叛乱と考える。しかし彼はここに十五世紀型から十六世紀型への過渡的様相をみている。[6] これに対しゲイは農民の農業的な不満の意義を認めず、この一揆をはつきりと「ジェントリー叛乱」とする。[7] バスカーヴィルはトーニーの見解に近く、小農民の果した大きな役割を重視しつつも、ジェントリー主導の一揆とみなしている。[8]

以上が大要従来の学説史的展望であるが、運動の政治過程を詳細に調べると、上述の何れの学説にも対しても私は不満を感ぜざるをえない。

まず、宗教運動説から検討すると、この叛乱はたしかに小修道院解散を契機として勃発しており、一五三六年十月二日、リンカンシャーの Louth にきた修道院解散の国王使節および調査委員を教区民が襲撃した事件が蜂起の導火線となつた。[9] リンカンシャーおよびヨークシャーにおいて立上つた叛徒のスローガンには、いずれにも「修道院解散反対」が明示されており、[10] 一揆には多数の司祭・修道士が参加している。また修道院が一揆に金や食糧を提供している事実もみられる。（第一表参照）[11]。一五三六年十二月初に叛徒は国王へ提出する二四カ条の要求を作成したが、聖職者は聖職者会議を開いて、その作成に一役を演じた。[12] このようなわけで聖職者が恩寵の巡礼においてなんらかの役割を演じたことは認めなければならない。

しかしこの叛乱に対して教会は決して組織体として参加しなかつたし、教皇は最後まで賛意を表明しなかつた。[13] というのは、参加した修道士や聖職者といえども、その大半は積極的に加つたのではない。たとえば、Barling 修院長が叛乱鎮定後の取調のときに「恐れと号泣と震えから食糧と金とを提供し、一揆に参加したのであつて、彼らを激励したことはない。」[14] と陳述しているのは明らかにこれを物語つており、聖職者は農民に強要され、生命と財産の喪失を恐れて、そうせざるをえなかつたのである。[15] 第一表で▲印のついているのは参加を強制された修道院である。[16] 托鉢

第 1 表　　参加した修道院および教区

州	修道院および教区	摘　　要
ヨークシャー	▲Bridlington p.	院長，修道士2，保有農11が参加，20 nobles を寄付
	▲Newburgh p.	修道士2が参加，40shillingsを寄付
	▲Byland a.	修道士2が参加，40shillingsを寄付
	▲Whitby a.	修道士2が参加，40shillingsを寄付
	▲Rievaulx a.	修道士2が参加
	▲Marton p.	修道士2が参加
	▲Kirkham p.	修道士2が参加
	▲Guisborough p.	修道士2が参加
	▲Mountgrace Carthusians	修道士2が参加
	Ferriby p.	20 noblesを寄付
	▲Jervaulx a.	院長が参加
	Sawley a.	院長，修道士21が蜂起の中心⑫
	Fountains a.	前院長が参加
	St Agatha's a.	修道院解散に積極的に抵抗
	▲York St Mary's a.	院長が参加。金，食糧，人を供給
リンカンシャー	▲Bardney a.	修道士が参加
	▲Kirkstead a.	全修道士が参加，金と食糧を提供
	▲Grimsby p.	修道士が参加
	Louth Park a.	修道士が参加
	▲Barling a.	院長，高位聖職者6が参加，金と食糧を提供
	Revesby a.	修道士が参加
	▲Louth 教区	教区司祭数人が参加
	Caister 教区	教区司祭が参加
	Rothwell 教区	教区司祭が参加
	Thoresway 教区	教区司祭が参加
	Elkington 教区	聖職者が参加
	Belchford 教区	教区司祭が蜂起を指導
ノーサムバーランド	Hexam a.	副院長と付属修院長が蜂起を指導
	Newminster a.	修道院解散に抵抗
カンバーランド	Holm Cultram a.	院長，修道士，保有農全員が参加
	Lanercost p.	修道院解散に抵抗
ランカシャー	▲Whalley a.	院長，修道士8が参加
	▲Furness a.	修道士が一揆のために人と金を集めた
ウェストモアランド	Clapham 教区	教区司祭が蜂起の主導者

註　p.＝ priory　　a. ＝ abbey

修道士や世俗司祭の下級聖職者が蜂起の指導者になつているのがみられるが、高級聖職者はこの危険な運動に参加するのが不本意で、[18] 何らの激励もあたえていないし、逃亡したものさえある。ヨーク大司教リー Lee は農民蜂起の報に接するや、ポンテフラクト城に逃亡し、この城が陥落したとき、他のジェントルメンと共に巡礼のなかに強制的に加えられたのであつた。[19] ところが、彼は後に一揆の人々に向つて「恩寵の巡礼」を非難し、[20] いかなる理由があろうとも「聖職者は剣をとるべきでない」[21] と語り、「国王に対する抵抗は罪悪である」と説教して、[22] 人民を憤激させた。またイングランド出身の枢機卿ポール Pole は恩寵の巡礼に援助の手をさしのべることを拒んだ。[23] Watton, Furness, Carlmell, の諸修院長およびグラム司教は一揆の徒に捕えられるのを恐れて逃亡した。[24] それに興味あることには、一揆が修道院のために蜂起したといわれているにかかわらず、[25] Coverham, Watton, Jervaux, Legbourne, Tynemouth, Norton などの多くの修道院は襲撃あるいは掠奪され、グラムやリンカーンの司教館が打こわされた。（第四表参照）。また大修道院がこの運動に無関係であつたという事実を指摘することができる。たとえば、リンカンシャーの三大修道院（Thornton, Spalding, Croyland）は全く事件の外にあつた。[37] これらの事実を考えると、「恩寵の巡礼」をカトリック教徒の単なる宗教運動として把握することは困難ではないかと考えられる。

つぎに、ジェントリー叛乱説の検討にうつると、叛乱の指導層がジェントリーであつたことは否定できない。叛乱の総司令ロバート・アスク Robert Aske は騎士の子息であり、ヨークシャーの法律家であつた。[38] リンカンシャーの闘争において Louth では六名、Caister では六名、Horncastle では六名、Boston では二名のジェントルメンが蜂起に参加している。[39] この運動において、ジェントリーがいかに指導権を握つていたかは第二次休戦会談直前ポンテフラクトにおいて開催された叛乱軍の代表者会議（1536. 10. 2—上）の構成をみるとよくわかる。それは貴族六名、騎士二四名、エスクァイア二七名、農民一六名から構成され、騎士階層を含めてジェントリー層が圧倒的多数をしめている。（第二表参照。）

第 2 表　　ポンテフラクト会議の構成メンバー

Lords (6名)	▲Lord Nevill, ▲Lord Scrop, ▲Lord Latymer, Lord Conzeres, ▲Lord Lumley, ▲Lord Darcy.
Knights (24名)	▲Sir Robert Constable, Sir James Strangwace, ▲Sir Christofer Danby, ▲Sir Thomas Hilton, ▲Sir William Constable, ▲Sir John Constable, Sir Peter Vauasour, ▲Sir Ralf Ellerker, Sir Christofer Hilyerd, ▲Sir Robert Neville, ▲Sir Oswold Willisthorp, Sir Edward Gower, ▲Sir George Darcy, ▲Sir William Fayrfax, Sir Nicolas Fayrfax, Sir William Maliore, Sir Ralph Bulmer, Sir William Bulmer, ▲Sir Stevyn Hamerton, ▲Sir John Daundy, Sir George Lauson, ▲Sir Richard Tempest, Sir Thomas Johnson, ▲Sir Henry Gasonye.
Escueres (27名)	▲Robert Aske, ◎John of Norton, ◎Richard Norton, Roger Lassels, Mr. Place, Mr. Fulthing, ▲Robert Bowes, ▲Richard Bowes, Dalewere, Barton of Whynby, Richard Lassels, Mr Redman, ▲Hamerton, Mr. Ralf Bulmer, ▲Richard Methuen, Saltmarsh, Palmers, ▲Acland, ▲Rudston, ▲Plimton, Myddilton, Allerton, Malleuere of Weddesome, Robert Chaloner, ▲William Babthorpe, Rither, Marmaduke Neville.
Commons (16名)	Robert Pullen, Nicholas Musgrave and 6 others from Penrith, William Collins and Brown from the borough of Kendal, Mr Duckett, Edward Manser, Mr Strickland, Anthony Langthorn, John Ayrey and Harry Bateman from the barony of Kendal.

註　▲—強制参加　◎—自由意志参加

E. H. R. vol. v. ; Dodds, The Pigrimage of Grace, 1536—7,

and the Exeter Conspiracy 1538, vol. I.　より作成

このような事実のみから判断すると、「恩寵の巡礼」をなるほどジェントリー叛乱と規定するのも無理ではないと思われるが、しかしこれらの指導的ジェントリーを一人一人可能なかぎり検討すると、彼らの大部分がこの事件の初発から加つているのではなく、強制的に指導者にされた人々であることがわかる。この点は重要である。蜂起の初発から加つていたのが認められるジェントルメンはわづかに二名にすぎない。（第二表の◉印）。リンカンシャーの二〇名のジェントルメンはほとんどすべてが強制参加である。[18] 北部の指導者の場合でも、六名の貴族のうちNevill, Scropから五名、二四名の騎士のうちSir Robert Constable, Sir Christofer Danbyら一五名、二六名のエスクァイアのうちRobert Askeら九名が参加を強制された。（第二表の▲印）。William Morlandが裁判のとき証言しているように「この地方のすべてのジェントルメンはこの一揆に飽きており、一揆を遺憾と思つていた。しかし彼らは生命を恐れて、彼らの意見を人民の前に敢て示す勇気がなかつたのだ」。[19]

ここにジェントリー叛乱説に対してもわれわれは手ばなしに賛成しがたいものであることが理解されると思う。なおいま少しく考察をすすめると、理論的にはそもそもジェントリーは領主的封建権力かあるいは絶対主義権力を背景としている階級であり、従つてこの封建権力をかさにきたジェントリー層がどうして封建権力に対抗関係にある小農民・小市民と共同闘争することができたかという疑問にぶつかる。ここで私は農民闘争を取扱う場合に考慮しなければならないことであるが、指導層とその下のエネルギーとは厳に区別すべきであるという当然のことから出発して、論を進めようと思う。すなわち、第一に「恩寵の巡礼」の主体的エネルギーの問題を、第二にこの運動におけるジェントリーの役割を考えよう。

① F. W. Russell, Kett's Rebellion in Norfolk, 1859, pp. 2~4.
② M. H. and R. Dodds, The Pilgrimage of Grace, 1536–1537, and the Exeter Conspiracy 1538, 1915, vol. I, p. 73.
③ Ibid., pp. 73–4, 226.
④ Victoria County History, Lincolnshire, vol. II, pp. 270–2.
⑤ P. Hughes, The Reformation in England, 1954, pp. 294–321.
⑥ R. H. Tawney, The Agrarian Problem in the Sixteenth Century, 1912, pp.318, 322–3.
⑦ E. F. Gay, The Midland Revolt and the Inquisition of

Depopulation of 1607, Trans. Royal Hist. Soc., New Series, vol. XVIII.

⑧ G. Baskerville, English Monks and the Suppression of the Monasteries, 1937, pp. 158, 160–1.

⑨ Letters and Papers of Henry VIII, vol. XI, 135, text in Dodds, op. cit., vol. I, p. 195; V. C. H., Lincolns., II, p. 273. ポラード Pollard は十月三日 Caister において国税補助金の徴収人を襲撃したのが叛乱勃発の契機であったとしているがこれは誤である。Cf. A. P. Pollard, Henry VIII, 1951,p. 283.

⑩ V. C. H., Lincolns., II, p. 273; L. and P., Henry VIII, XI, 705, text in K. Pickthorn, Early Tudor Government, Henry VIII, 1951, p. 328.

⑪ 第一表は V. C. H., Lincolns. II; V. C. H., Yorks. III; Dodds, op. cit., vol. I; Hughes, op. cit., vol. I; Pickthorn, op. cit.; English Historical Review, vol, v. により作成。

⑫ ここの一修道士が有名な「恩寵の巡礼」の歌を作った。L. and P. XI, 786 (3), E. H. R., V, p. 331.

"Christ crucified
For thy wounds wide
Us commons guide
That pilgrims be" (E. H. R., V, p. 334.)

⑬ Pickthorn, op. cit., p. 349. この会議に出席した聖職者は次のとおり。John Ripley, Kirkstall 修院長; 聖堂付司祭; Dr Sherwood, Beverley 付属聖堂尚書係; Dr Cliff; Dr Langrege, Cleveland 大助祭; Dr Geoffrey Downes, York 尚書係; Dr John Brandsby, 大司教座聖堂付司祭; Dr Cuthbert Marshall, Nottingham 大助祭; James Thwaites, Pontefract 修院長; Dr Waldby, Kirk Deighton 教区司祭; Dr Pickering, 托鉢修道士教士; Dr Rokeby 托鉢修道士; Dr George Palmes, Sutton-upon-Derwent 教区司祭; Dr Dakyn, Kirkby Ravensworth 教区司祭。 L. and P. XII (1), 786 (ii, I), Dodds, op. cit., I, p. 382.

⑭ Dodds, op. cit., II, p. 330.

⑮ L. anp P. XII (1), 805, Dodds, op. cit., II, p. 155.

⑯ 例I。Whalley 修院は三一四〇〇の一隊の徒に襲撃され、院長と修道士八名は当初は抵抗したが、修道院を焼かれるのを恐れて、一隊に誓をし、巡礼に参加した。L. and P. XII (1), 1034, Dodds, op. cit., I, p. 219.

例II。John Dakyn (ヨーク管区長代理) は一度一隊をさけて逃亡したが、農民が彼の財産を掠奪しようとしているのを聞き、恐れて帰り、巡礼に参加した。L. and P. XII (1), 788, Dodds, op. cit., I, p. 202.

⑰ とくにリンカンシャーにおいては参加した聖職者はほとんど全員、強制された人々であった。Hughes, op. cit., I, p. 300.

⑱ Pikthorn, op. cit., p. 366.

⑲ V. C. H., Yorks., III, p. 412; Pickthorn, op. cit., p. 331.

⑳ E. H. R., V, p. 572.

㉑ Pickthorn, op. cit., p. 349.

㉜ Hughes, op. cit., I, p. 313.

㉝ Dodds, op. cit., II, p. 330.

㉞ E. H. R., V, pp. 338–9.

㉟ L. and P. XI, 947 (2), Dodds, op. cit., I, pp. 217–8.

㊱ Ibid.

㊲ L. add P. XII (1), 369, 22, Dodds, op. cit., I, p. 203.

㊳ Mashamshire と Nidderdale の農民らに襲撃された。Dodds, op. cit., I, p. 201.

㊴ E. H. R., V, pp. 338–9.

㊵ Mashamshire と Kirkbyshire の二一三〇〇の農民がこの修院を襲撃し、院長の Adam Sedban をうばい、三〇匹の去勢羊を掠奪した。L. and P. XII (1), 1035, Dodds, op. cit., I, p. 202, II, P. 18.

㊶ L. and P. XI, 135, Dodds, op. cit., I, p. 93.

㊷ Ibid., II, p. 38.

㊸ クロムウェルによって任命された院長と高級聖職者三名が襲撃をうけた。 Ibid., p. 214.

㊹ 年収入 £ 584 9s. $10\frac{4}{3}$d., A. Savin, English Monasteries on the Eve of the Dissolution (Oxford Studies in Social and Legal History, vol. I), 1909, p. 276.

㊺ 年収入 £ 764 16s. 6 d., Savin, op. cit., p. 276.

㊻ 年収入 £ 947 3s. 8 d., Savin, op. cit., p. 276.

㊼ Hughes, op. cit., I, p. 302.

㊽ J. A. Williamson, The Tudor Age, 1953, p. 146; V. C. H.,Yorks.,III, p. 412. トマスはリンカンシャーが蜂起したときたまたまロンドン向う途上リンカンシャーにいたので農民に捕えられ、一揆の指導者とされた。

㊾ リンカンシャー一揆に参加した主要なジェントルメンは次のごとし（▲印―強制参加）

Lauth……	▲Sir William Skipwith, Markby 修院借地農; ▲William Eleyn 国王使節; ▲JohnBrowne 国王使節; ▲John Milsent 国王使節顧員 ; Thomas Manby; ▲George Parker
Caistr……	▲Sir William Askew国王使節; ▲Sir Edward Madeson; ▲Mr Booth; ▲Sir Robert Tyrwhit 国王使節; ▲Thomas Portington; ▲Sir Thomas Messydyn.
Horncastle…	▲Edward Dymmoke 地方長官; ▲Sir Robert Dymmoke, Edwardの父; ▲Arthur Dymmoke; ▲Mr Dighton of Sturton; ▲Mr Sanderson; Thomas Aske 法律家
Boston……▲Sir John Sutton; ▲Robert Sutton.	

この表は V. C. H., Lincolns. II; V. C. H., Yorks.III; Dodds, op. cit., I, II; Hughes, op. cit., I. より作成。

㊿ 註㊾を参照。

(51) L. and P. XII (1), 380, Dodds, op. cit., I, p, 124)

三　農民蜂起の経過

本論に入る前に、まず「恩寵の巡礼」の経過を段階づけておこう。この運動は大きくリンカンシャー一揆（一五三六年十月二日―十三日）と北部の叛乱（同年十月八日―三七年二月十日）とにわかれ、それぞれはほぼ同じ経過をたどつて展開した。両一揆とも三つの局面をもち、第一の局面は農民蜂起、第二はジェントリーの参加と指導、第三は分裂と敗北である。農民闘争における主体的エネルギーの問題を考察するには、第一の局面＝農民蜂起の段階から検討をする必要がある。

周知のように、一五三六年十月、小修道院解散令が発令され、年価値二〇〇ポンド以下の修道院は国王の所有に帰することになつた。[1] この解散令によつて最も甚大な打撃をうけたのはリンカンシャーとヨークシャーの東部であつた。解散の憂目にあつた総小修道院二四四[2]のうち、前者には三四、後者には二五の小修院があつたと算定される。[3] 両地方は修道院総数九〇のうち五九を失つたのであるから、三分の二が破壊されたことになる。大修道院の多い西部諸州と比較するとその影響の大きいのがうかがえる。（第三表参照）。

第3表　小修道院解散

地方	修道院数	解散修道院数	未解散修道院数	没収年収入	未没収年収入
Lincolns.	46	34	12	31% of total, i. e. £2,346	£ 5,152
Norfolk and Suffolk	40	28	12	28% 〃 〃 £2,397	£ 6,026
East Yorks.	44	25	19	19% 〃 〃 £1,725	£ 7,312
All North less East Yorks.	46	19	27	15.5% 〃 〃 £1,656	£ 9,053
The 7 Western Counties	75	25	50	6.7% 〃 〃 £2,322	£23,179

註　The 7 Western Counties … Berks, Hants, Dorset, Somerset, Wilts, Gloucester, Worcester; Hughes, The Reformation in England, vol I., p. 296.

第 4 表　　農民蜂起

州	蜂起場所	蜂起期日	指導者	攻撃対象
リンカンシャー	△Lauth	10月2日	靴製造人④	国王使節，修道院土地譲受ジェントルマン⑤
	○Caister	3日	ジェントルマン1，荘司2，聖職者4⑥	国王使節，ジェントルメン⑦
	△Horncastle	3日	教区司祭と彼の弟⑧	司教区尚書係，司教館，地方長官父子⑨
	Boston	8日	?	ジェントルメン，修道院⑩
ヨークシャー	△Beverley	8日	小市民3⑪	ジェントルメン⑫
	△Marshland	10日	小農民ら	?
	○Howdenshire	10日	ジェントルマン2⑬	?
	△Wresell	11日	ヨーク大司教の保有農	ヨーク大司教，ノーサムバーランド伯，ジェントルメン。⑭
	△Mashamshire	11日	小農民ら	ダラム司教，司教館，修道院長，ウェストモランド伯，
	△Kirkbyshire	11日	小農民ら	ジェントルメン⑮
	Nidderdale	11日	?	Coverham abbey ジェントルメン⑯
	△Watton	12日	ヨーマン⑰	?
	△Holderness	12日	小農民3⑱	ジェントルメン⑲
	Cottingham	12日	?	?
	Hessle	12日	?	?
	Hunsley	12日	?	?
	Tranby	12日	?	?
	△Halifax	?	荘司⑳	ジェントルマン㉑
	Richmond	13日	?	ジェントルメン㉒
	△Dent	14日	教区司祭，小農小市民5㉓	?
	△Skipton	17日	小農民2㉔	悪評地主のカンバーランド伯，ジェントルメン㉕
	△Wakefield	22日	荘司㉖	修道院領の借地人，ジェントルメン㉗
	△Hutton-Cranswick	?	荘司，小市民3㉘	?
	△Driffield	?	同上	?
	△Yorkswold	?	同上	?
ノーサムバーランド	○Hexham	?	修道副院長，付属修院長㉙	修道院領を借地したジェントルマン，国王使節㉚
	○Alnwick	22日	ジェントルマン㉛	?
カンバーランド	△Penrith	19日	小市民4㉜	カーリースル司教，ジェントルメン㉝
ランカシャー	△Sawley	12日頃	教区司祭㉞	国王使節，修道院長，ジェントルメン㉟
ウェストモアランド	△Kendal	15日	小市民2㊱	ジェントルメン㊲
	△Kirkby Stephen	16日	小市民4㊳	ジェントルメン㊴
ダラム	Sepennymoor	?	下層市民㊵	Lord Lumley父子㊶

○＝ジェントリー蜂起　△＝農民自身の蜂起

これがリンカンシャーとヨークシャーを中心に叛乱がおきた一つの原因であることは明らかだ。ついで同年十月には解散実施の国王使節が派遣された。リンカンシャーおよび北部全州の多くの村落が相ついで蜂起した。各地の農民蜂起の事情を表示すると第四表のごとくなる。

第四表の三二カ所の主要な蜂起のうち、ジェントリーが初発から指導したものは Cuister, Howdenshire, Alnwick, Hexham のわづか四ケ所にすぎず（第四表の○印）、Louth, Beverley, Kendel をはじめ二〇カ所においては、ジェントルマンの指導を仰がず、小農民・小市民のみで立上つた純粋の農民蜂起がみられる。（第四表の△印）。残りの八カ所もジェントリー指導の蜂起でない推定をすることができる。こうして第二表と第四表の資料から、蜂起の初発には、指導層はジェントリーではなく、小農民・小市民であつたことが明かになる。

次に、これらの農民蜂起を攻撃対象から分類すると、ジェントルマンに対する襲撃が最も多く、Lauth, Beverley ら一八件、貴族に対しては Wresell, Skipton ら六件、国王使節に対しては Cuister, Hexham ら四件、修道院および司教に対する攻撃が、Horncastle, Sawley ら七件もみられる。（第四表参照）。全般的にみて農民蜂起の段階では特に悪評の地主ジェントルマンに攻撃が集中していることが特長づけられる。小農民・小市民は信仰問題には餘り関心を示さず、それよりも社会改革に一層強い要求をもつていた。このように多くのジェントルマンや修道院あるいは聖職者が襲撃されているのをみても、この叛乱が単なる「宗教運動」ではなく、また「ジェントリー叛乱」でもない見当がつくのであるが、もう少したちいつて農民自身の不満要求の面からこの運動の性格を究明してみよう。

十月初リンカンシャーの農民大衆が、逮捕したジェントルメンに対し、自分たちの意見をのべている。この意見はジェントリーの考えに影響されていない率直な農民大衆の気持を表わしていると考えられるので以下に引用しよう。

「人々は喜んで国王を教会の首長とするであろう。国王はすべての聖職禄の初穂料および十分一税を、また国費補助金をうけとるべきである。しかし国王は生涯の間、これ以上の金を人民からとりあげるべきでないし、またこれ以上、修道院を解散すべきでない。クロムウェルおよび Canterbury, Lincoln, Rochester, Ely,

Worcester, Dublin の異端司教は人民に引渡されるべきである。」と。[12]

これはジェントルマン指導後にかかげられたリンカンシャー一揆のスローガン[13]とはかなりのえだたりを示している。農民大衆はむつかしい神学問題には関心を示さず、国王の教会首長令を承認している。[14]初穂料・十分一税が教皇からイギリス国王へ奪われてゆくことにも不審をいだいていない。また国王が国費補助金を受領するのは当然と考えており、解散修道院の復旧をうたわず、ただ国王自身の意志によつて解散された修道院以外の新たな解散に反対しているにすぎないのである。[15]ジェントリーの要求と考えられるユース法の廃止は片言もでてこない。要するに、リンカンシャーの農民たちはクロムウェルに代表される政府の無鉄砲な収奪の強化に反対して蜂起したことがうかがえるのである。

北部の一揆のうちで最も純粋な「農民叛乱」の形をとつたのはウェストモアランドとカンバーランドであつた。この両州ではジェントリーと聖職者はほとんど参加しなかつた。[16]農民は修道院や教会問題に特別の熱意を示さず、[17]もつぱらエンクロージェアの打こわし[18]と悪評地主への攻撃に鋒先を集中し、地代や一時金を支払わないですむようにジェントルマンを殺害した。[19]この農民の不平不満は一揆の代表者会議に提出された『ウェストモアランドの農民要求』にうたわれている。この要求を要約してみると、[20]

一、保有地相続料 gyrsum に関し、小保有地に対しては低額の相続料であるべきこと。
一、不在聖職者は追放されるべきこと。
一、十分一税は各人の自由意志による同意におきかえられるべきこと。
一、家畜や穀物の上納は廃止されるべきこと。
一、共有地と荒地の囲込は貧しい人々のために廃止されるべきこと。
一、税金は在住聖職者に対しても不在聖職者に対しても同じように課せられるべきこと。

このウェストモアランドの農民要求はドイツ農民戦争の十二カ条の要求にも比定されるべきもので、注目に値する。農民たちは低額の相続料や共有地利用権など長い間闘争して獲得してきた慣習権の維持と、さらに家畜・穀物の

上納廃止や十分一税の自由意志による決定など封建的束縛の破砕を絶叫している。ウェストモアランドとカンバーランドには北部特有の慣習自由保有権が確立していた。[31] 農民はこれらの有利な既得慣習権を修道院解散によつて失うのではないかと恐れ、新しい地主が、より重い負担を小農民の上にかけてくることを彼らは心配したのであつた。[32]

ヨークシャーの Jervaux 修院長 Adam Sedbar は彼の保有農が巡礼に参加するのを禁じたという理由で農民たちに吊しあげられたが、[33] 彼は後にロンドン塔内でクロムウェルに次のようなことをいつている。「閣下。あなたは修道士や司教座聖堂参事会員 canons が一揆の首謀者であつたと考えるようにだまされている。……農民の不平は Middleham の地主制にむけられている。……Piercebindge の農民たちは『われらが Middleham の新しい地主をつくるだろう……』といい、Mashamshire の人々も同じようなことを云つていた。」[34] と。

このように彼らの運動は「恩寵の巡礼」の旗印をかかげながら、信仰問題には興味がなく、地代引下げと囲込反対に焦点がむけられ、悪評地主ジェントルマンに対する襲撃に終始した。これは「修道院解散反対」というスローガンが表面に高くかかげられながら、その裏には慣習権確保・封建的束縛の打破という成長しつつある封建的小農民の基本的要求が本流として流れていることを示している。

つぎにこの叛乱を財政面から分析しよう。巡礼の兵士たちは一種の志願制であつたから、彼らは一日八ペンスの俸給をうけた。ヨークシャーの Lumley 指揮下の一揆勢は最初に二〇シルリングを受取つたといわれている。[35] これらの戦費は原則としてはその地方の町村落に割当課税をし、徴収された。[36] 一揆の指導者の一人であつた Darcy がこの費用を教区から規則正しく徴発し、それを人々が喜んで援助した資料がみられる。[37] また王軍へ裏切つた Sir Henry Saville が叛乱の臨時戦費を集めていた人を捕えて、人民の大きな怒りを買つている。[38] しかしジェントリーは自分の費用で運動に参加しなければならなかつた。一例をあげると、Sir Robert Constable は担保を出し £ 165 8s. 3d. という大金を John Lambart から借りうけ、一揆の費用にあてている。[39] 費用の不足分はジェントルマンや修道院からの強奪あるいは強制寄付[40] または逃亡した貴族やジェン

トルマンの没収財産で補われた。[33]

これは叛乱の運動資金が基本的には農民層自身の中から捻出されたことを示している。それならば北部の農民大衆がどうしてこのような大きなエネルギーをもちえたかという問題がでてくる。しかしこの論文は一揆の政治過程に焦点をあわせており、この詳しい分析は後日の研究にゆずらなければならない。[34]

① 27 Henry VIII, C. 28. (J. R. Tanner, Tudor Constitutional Documents, A. D. 1485–1603, with an Historical Commentary, 1922, pp. 59—60)

② イングランドの全修道院数は四六九であり、小修道院解散令に適用されるのは二九一であり、そのうち実際に解散されたのは二四四であった。Hughes, The Reformation in England, vol. I, p. 295.

③ フィッシャー Fisher およびウィリアムソンによればヨークシャー全州では五三の小修道院が解散された。H. A. L. Fisher, The History of England, from the Accession of Henry VII. to the Death of Henry VIII. (1485–1547) 1906, p. 380; Williamson, The Tudor Age, p. 146. 小松芳喬「修道院解散と農業革命」（「封建英国とその崩壊過程」所収）一四一頁。

④ Nicholas Melton という名の靴製造人。L. and P. XI, 854, Pickthorn, Early Tudor Government, Henry VIII, p. 305; L. and P. XI, 135, Victoria County History, Lincolnshire, vol. II, p. 272.

⑤ 殺害されたのは修道院解散のための国王使節とその随員 William Eleyn, John Browne, Thomas Manby, John Milsent (L. and P. XI, 135, V. C. H., Lincolns., II, p. 272) とその調査員 Mr John Frankishe, John Hennage (V. C. H., Lincolns., II, p. 271) および Markby 修院の土地護受人 Sir William Skipwith of Ormsby (L. and P. XI, 324, 854, Dodds, The Pilgrimage of Grace, I, p. 95; Pickthorn, op. cit., p. 305; Hughes, op. cit., I, p. 300)

⑥ 指導者の主要な名前をあげると、George Hudswell ジョン・ムルマン、Walter Redmere of Fulstow town, Charles Godande of Kermounde, Middle Rasen 荘司、Parson Skerne, Louth Park 修道士、Elkington の聖職者、Rothewell juxta Caistor 教区司祭、Thomas Foster of Lowth, one Bawnus William King, Louth 荘司、Robert Browne, Melton, 靴製造人、Robert Spencer と彼の兄弟 (V. C. H., Lincolns., II, p. 272)

⑦ 国政補助金調査の国王使節 (L. and P. XI, 971, Dodds, op. cit., I, p. 97) と Sir Robert Tyrwhit, Sir William Askew, Sir Edward Madison, Thomas Portyngton, Sir Messydyn, Thomas Moigne を殺害。(V. C. H., Lincolns., II, p. 272)

⑧ Belchford の教区司祭 Nicholas Leache と彼の弟 William Leach. (V. C. H., Lincolns., II, p. 272)

⑨ Dr John Rayers（リンカン司教尚書官）を殺害。(V. C.

H., Lin., II, p. 273.) Edward Dymoke (地方豪族)′Sir Robert Dymoke, Mr Dighton of Stuston, Mr Sanderson を攻撃° (V. C. H., Lin., II, p. 272; Dodds, op. cit., I. p. 101) リンカン司教館を打こわし (V. C. H., Lin.,II, p. 273)

⑩ Sir John Sutton, Robbert, Sutton, Disneys のジェントルメンを逮捕° (Dodds, op. cit., I, p. 214) Berling 修院を襲撃° (L. and P. XI, 805, Dodds, op. cit., I. p. 105)

⑪ Roger Kitchen, Richard Wilson, Richard Newdyke. (L. and P. XI, 841, Dodds, op. cit., I, p. 145) Beverley の特別裁判官がダラムのそれと共に廃止されたのを理由に蜂起した° (Ibid., I, p. 144)

⑫ William Stapleton, Brian Stapleton を逮捕° (Ibid., I, p. 151)

⑬ トマスの命令で Nicholas Rudston, Metham の二人のジェントルメンが指揮° (Ibid., I, p. 158)

⑭ Ibid., pp. 149—151; Pickthron, op. cit., p. 320.

⑮ Jervaux 修院の院長は彼の保有農が巡礼に参加するのを禁じたので襲撃された° (L. and P. XII(1), 1035, Dodds, op. cit., I, p. 202) ダラム司教の記録所および司教館が打こわされた° (L. and P., XII (1), 29, 789, Dodds, op. cit., I, p. 204) Sir Francis Bigod,George Lumley 父子を逮捕° (Ibid., I, pp. 204—6)]

⑯ Lord Latimer, Sir Christopher Danby を逮捕° 彼らは生命と財産を恐れ巡礼に参加° Lord Scrope は逃亡° (Ibid., I, p. 201)

⑰ Watton 修院付近に Calkhill 農場をもち′近隣のジェントルーと同じ位の勢力をもつていた John Hallam ならびにトマスが指揮° (Pickthorn, op. cit., p. 320)

⑱ Ric Tenant, Wm Barher, Wm Ombler (L. and P., XII (1), 201, Dodds, op. cit., I, p. 155)

⑲ Sir Christopher Hilliard, one Grinston, one Clifton, Ralph Constable, John Wright を逮捕° (Dodds, op. cit., I, p. 155) 多くのジェントルメンは国王のために守備された Hull に逃亡° (Pickthorn, op. cit., p320)

⑳ Sir Richard Tempest の従弟 John Lacy. (Dodds, op. cit., I, p. 236)

㉑ 逃亡したジェントルマン Saville の家を打こわした° (Ibid.)

㉒ Barnard 城を攻略し′そこにいた Robert Bowes, George Bowes, Richard Bowes, Thomas Rokeby, Sir Henry Gascoigne および John Dakyn (ヨーク司教総代理) を逮捕° (L. and P. XII (1), 775, 788, Dodds, op. cit., I, p. 202)

㉓ Atkinson, James Cowper, John Middleton, John Hebyllthwayte of Sedbergh, James Bushell of Middleton, Clapham 司教代理 (Ibid., I, p. 217.)

㉔ James, Fawcett. (Ibid., I, p. 209)

㉕ 農村地主であつたカンバーランド伯の家や公園を打こわした° (L. and P. XI, 927, Dodds, op.cit., I, p. 211) Sir Stephen Hamerton, Nicholas Tempest を捕えて′巡礼に参加させた° (Ibid., I, pp. 209—10)

㉖ Darcy の執事であり共同であった Thomas Grice が指導して、約六〇〇人が蜂起。(Ibid., I, p. 237)

㉗ Sir William Fairfax (Ferriby priory's farmer) をはじめ、この地の大部分のジェントルメンを襲撃し巡礼への参加を強制。(L. and P. XII(1), 392, Dodds, op. cit., I, P. 237)

㉘ Robt. Hotham (the Earl of Westmorland's servant), James Constable of the Cliff, Philip Waldeby, Lygerd of Hullshire. (L. and P. XII (1), 392, Dodds, op. cit., I, p. 157—8)

㉙ Hexham 副修院長と Ovingham 付属修院長がこの修道院の解散に反対して蜂起。(Ibid., I, p. 193)

㉚ 修道院解散の国王使節 Robert Collingwood, Gray らとこの修道院を政府から新しく借りうけた Sir Reynold Carnaby を襲撃。(Ibid., I, pp. 197—8)

㉛ ノーサムバーランド伯によって Vice-warden の職を奪われた Sir Ingram Percy が中心で、Sir Humphry Lisle, Lobert Swinhoe, John Roddam らのジェントルメンが合流。(L. and P. XI, 736, Dodds, op. cit., I, pp. 198—9)

㉜ Anthony Hutton, John Beck, Gilbert Whelpdale, Thomas Burbeck. 農民たちは彼らの一隊の概旨のシィボルとして、指導者に Faith, Poverty, Pity, Charity の名前をつけた。(Tawney, The Agrarian Problem, p. 319; Dodds, op. cit., I, p. 226)

㉝ Bishop of Carlisle, Sir Edward Musgrave, Bernard Towneley (尚書保)、Richard Bewley, Richard Vachell, Sir John Lowther (Ibid., I, pp. 220—2)

㉞ 教区司祭の John Atkinson が指導し、Sawley 修院が蜂起の中心。(L. and P. XI, 784, Dodds, op. cit., I, p. 213)

㉟ 修道解散のための国王使節が Cheshire その他数カ所で襲撃された。(L. and P. XI, 635, Dodds, op. cit., I, p. 213) Furness 修院長と副執事および Cartmell 修院長および Lord Montegle, Sir Marmaduke Tunstall, Sir Robert Bellingham らは一隊を進めて逃亡。(L. and P. XI, 947 (2), Dodds, op. cit., I, p. 218)

㊱ Tom Dockway, Brian Jobson が中心であり、Sir James Legborne らは農民たちに蜂起しないように忠告を与えている。農民たちは「われらのジェントルメンは参加しないだろう」と言っている。(L. and P. XII (1), 914, Dodds, op. cit., I, p. 216—7)

㊲ Sir James Legborne らジェントルメンを襲撃し、囲込、十分一税、地代の廃止あるいは引下げを要求した。(L. and P. XII (1), 687 (2), 914, Dodds, op. cit., I, pp. 295, 217)

㊳ Robert Pullen, Nicholas Musgrave, Christopher Blenkinsop, Robert Hilton. (Ibid., I, p. 221)

㊴ Sir Thomas Wharton, Sir John Lowther らジェントルメンを襲撃、全部逃亡。(Ibid.)

㊵ Victoria County History, Durham, vol. II, p. 164.

㊶ Lord John Lumley, George Lumley (John's son) (L. and P. XII (1), 615, 478, V. C. H., Durham, II, p. 164)

㊷ L. and P. XI, 853, Pickthorn, op. cit., pp. 305—6.

⑬ これは第四節でくわしくのべるが参考までにあげると(一)解散修道院の復旧、(二)国費補助金の免除、(三)聖職者の十分一税・初穂料の免除、(四)ユース法の廃止、(五)異端司教の追放、(六)低身分官僚の免職。

⑭ Cf. Williamson, op. cit., p. 145.

⑮ Hughes, op. cit., I, p. 302.

⑯ Pickthorn, op. cit., p. 311.

⑰ Ibid.

⑱ この地方は他処に比べて共有地の囲込が多く、囲込がこの地方の主な不平であつた。すでに一五三六年八月に Sir Thomas Wharton が「カンバーランドには暴動が多く、それは多分囲込反対の運動であつた。」とクロムウェルに報告している。(Dodds, op. cit., I. p. 220)

⑲ Tawney, op. cit., p. 319.

⑳ Dodds, op. cit., I, p. 370—1.

㉑ Ibid., I, p. 369.

㉒ Pickthorn, op. cit., p. 312.

㉓ L. and P. XII (1), 1035, Dodds, op. cit., I, p. 202.

㉔ L. and P. XII (1), 1269, Dodds, op. cit., I, p. 208.

㉕ Ibid., I, p. 233.

㉖ Ibid.

㉗ Ibid., I, p. 288.

㉘ Ibid.

㉙ L. and P. XI, 1070, XII (1), 698 (2), Dodds, op. cit., I, p. 286.

㉚ 例Ⅰ。Lumley は Byland, Newburgh, Whitby の修道院長からそれぞれ四〇シルリングを、Bridlington の修道院長から二〇ノーブルと四ポンドを寄付された。アスクはかかる献金に名を借りた徴税をかたく禁止した。(Ibid., I, p. 232—3)
例Ⅱ。Marton 修院の鉛が巡礼の徒によつて没収され、アスクは £9 13s. 4 d. をうけとつた。(L. and P. XII (1), 698 (2), Dodds, op. cit., I, p. 286)
例Ⅲ。Watton 修院にあつたノーサムバーランド伯の spice plate を没収。(L. and P. XI, 1039, Dodds, op. cit., I, p. 286—7)

㉛ 例Ⅰ。Halifax の教区司祭 Dr Holdworth が逃亡したので、その財産を没収し、その金一〇ポンドを一揆の費用にした。(L. and P. XI, 997, Dodds, op. cit., I, p. 286)
例Ⅱ。税金徴収吏が巡礼の徒に捕えられ、所持していた三〇〇マルクは一揆の費用のために没収された。(L. and P. XI, 997, Dodds, op. cit., I, p. 286)

㉜ ここではただ毛織物工業との関係を展望するにとどめる。ヨークシャーでは十二・三世紀頃すでに毛織物工業がかなり発展しており、(H. Heaton, The Yorkshire Wollen and Worsted Industries, 1920, pp. 3—7) 十五世紀までは York, Beverley がその中心であり、この両市がギルド的特権をもつて北部の毛織物業を支配していた。(Heaton, op. cit., pp. 31—2) 十五世紀後半を転機として West Riding を中心として農村毛織物工業が急速に発展し、York, Beverley の中世的ギルド都市の織元に

対抗した。(Heaton, op. cit., p. 47) Halifax, Ripon, Wakefield などの農村都市が毛織物業をバックとして隆盛してきたのに対し、ギルド都市 Beverley は没落して行つた。ところみに一四七三—五の二年間のヨークシャー各地の毛織物生産高を表示しよう。(第五表)。十六世紀前半には北部に農民的商品経済が相当根強くかつ広汎に滲透していたことがいえる。(大塚久雄「近代欧洲経済史序説」上、同「近代資本主義の系譜」を参照。)

第 5 表

ヨークシャーの毛織物生産高1473—5（2年間）		
York	2,346 $\frac{1}{2}$	Cloths
Halifax	1,493 $\frac{1}{2}$	Cloths
Ripon	1,386 $\frac{1}{2}$	Cloths
Almondbury	427	Cloths
Hull	426 $\frac{1}{2}$	Cloths
Leeds	320	Cloths
Pomfret	214 $\frac{1}{2}$	Cloths
Bradford	178 $\frac{1}{2}$	Cloths
Wakefield	160	Cloths
Barnsley	142 $\frac{1}{2}$	Cloths
Doncaster	35 $\frac{2}{1}$	Cloths
Selby	19	Cloths

H. Heaton, The Yorkshire Woollen and Worsted Industries, p. 75.

さて、この毛織物と巡礼の関係はどうであろう。Halifax, Wakefield, Skipton, Ripon, Hull, Leeds など農民蜂起および再蜂起の地の多くが農村毛織物工業の中心であつた。Beverley のような中世的ギルド都市では、再蜂起のとき、Richard Wilson, Roger Kitchen, John Francis らの小市民が市の十二人長老会というギルド的特権市民の会合を破砕するために立上つている。(Dodds, op. cit., II, p. 61) 一揆勃発を聞いたヘンリー八世は毛織物製造業者の不平をしづめるために、ただちに毛織物製造規格統制令の実施を延期し、大商人や司教の援助をえて、毛織物の大量購入をする計画をしている。(Ibid., I, p.117—121) これをみてもこの巡礼と農村毛織物業が密接に関係のあることがうかがえるが、要するに、毛織物工業を中心とする農民的商品経済が北部とくにヨークシャーにかなり進展し、それによつて蓄積された農民の剰余労働のエネルギーがこの農民一揆の原動力であつたと考えられる。

（以下次号）

The Institution of Li-chia (里甲) in Chian-nan (江南)

by

Tatsuo Obata

The foundation for the institution of Li-chia (里甲) of early Ming (明) Dynasty through Ch'ing (清) Dynasty was principally a certain number of houses. However, the same institution dependent on a certain number of mu (畝) became prevalent in middle China under the reign of K'ang-hsi (康熙, 1662-1722). Such an institution dependent on the mu was not originated in Ch'ing (清) Dynasty, but some of its examples can be traced back to middle Ming (明) Dynasty. The writer, investigating local sources (地方志), has got to know that the method based on the number of mu was exceptional as early or earlier than the reign of Shun-chi (1644-61), but came to be a rule under the reign of K'ang-hsi. This article intends to describe how this new method was carried out in Chiang-nan (江南) district.

The Historical Background of the Pilgrimage of Grace

by

Jiro Tomioka

Very little attention has been paid to the riot of "The Pilgrimage of Grace (1536-37)" which is one of the important incidents at the establishment of the English absolutism. As for the study of the English gentry in Japan, although some excellent works were published on the gentry itself being commonly considered as the social foundation for the absolutism, the relation between the absolutism and the gentry has remained unsolved. The problems discussed in this essay are: why and how the small farmers became so powerful; what part the gentry played in this incident; and thus what was the very nature this riod.